

小説

脱税

北條恒一

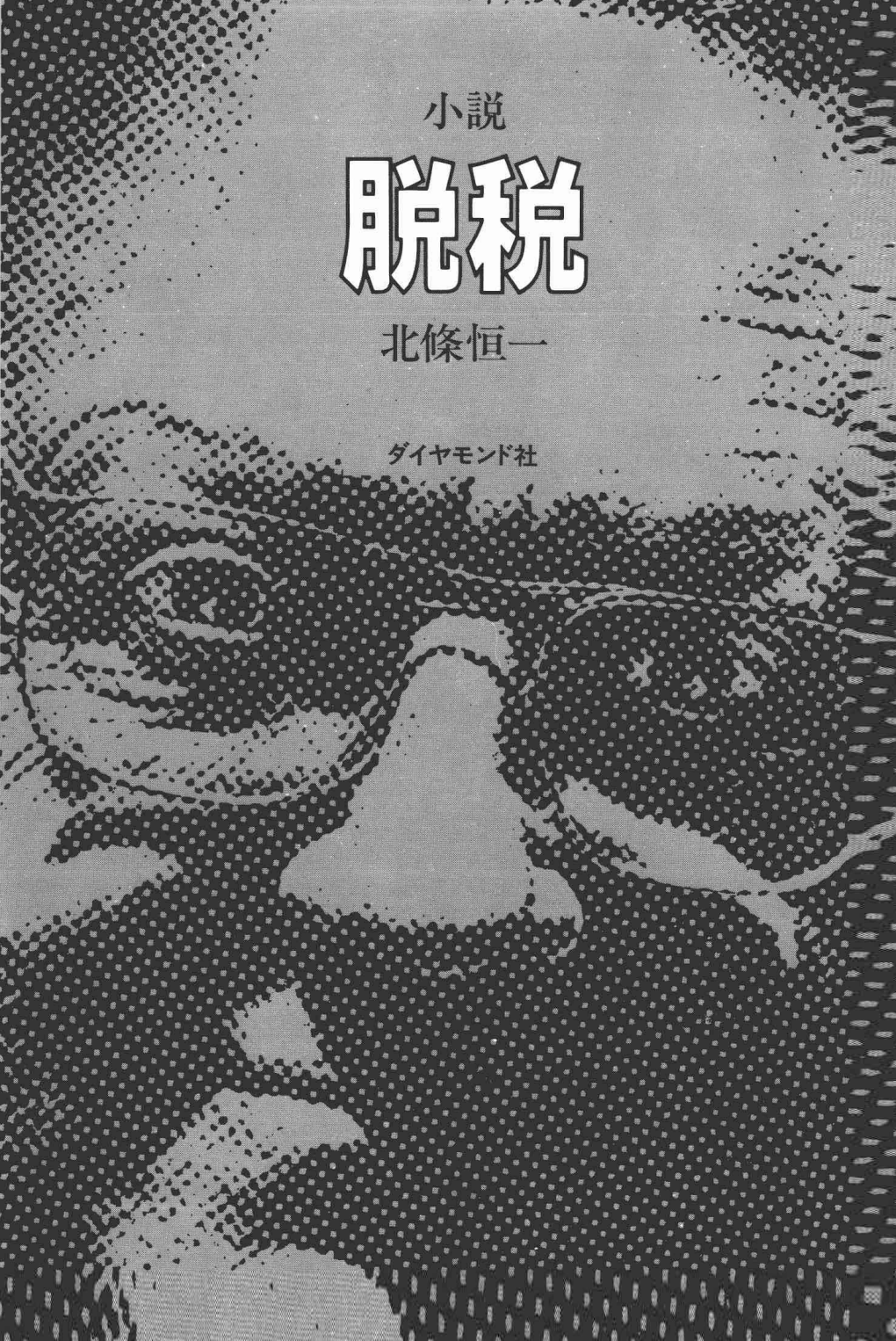


小説

脱税

北條恒一

ダイヤモンド社



著者略歴

北 條 恒 一

昭和15年、小樽高商(現・小樽商大)卒業。
公認会計士。現在、東京都立商科短期大
学〈経営学科〉教授。

日本ペンクラブ会員・日本評論家協会会
員・日本会計研究学会会員。

著述：『不動産の税金対策』『減価償却入
門』『会社実務計算便覧』『病・医院の経
営と税務』『民商く奪められた反税闘争を
衝く』『税務用語辞典』(以上、実業之日
本社)、『やさしい税務会計』『やさしい
管理会計』(以上、大蔵財務協会)、『複式
簿記の研究』(国元書房)、『贈与・相続の
節税』『土地建物の節税』(ばるす出版)、
『チェックポイント活用・税務調査の実
務』『社長・重役のための節税必携』『税
金を軽くする事典—早わかり節税百科』
『会社商店版・税金を軽くする事典』『税
金を軽くする青色申告入門』(以上、ダイ
ヤモンド社)。

研究室：東京都千代田区神田駿河台 4-2
お茶の水ビル

TEL (251) 0128

小説 脱 税

昭和 53 年 2 月 9 日 初版発行

著 者 北 條 恒 一

© 1973 Koichi Hojo

発行所 ダイヤモンド社

郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集 電話 東京 (504) 6403
販売 電話 東京 (504) 6517
振替口座 東京 9-25976

落丁・乱丁本はお取替えいたします

堀内印刷・中西製本
0393-070140-4405

小説
脱税
目次

5	4	3	2	1
防戦(その一)	反面調査	国税調査官	脱税工作	共同謀議
77	61	45	23	3

6	防戦(その二)	93
---	---------	----

7	実地調査	113
---	------	-----

8	ガサ入れ	151
---	------	-----

	解説 実録脱税事件	187
--	-----------	-----

装丁 高間 豊

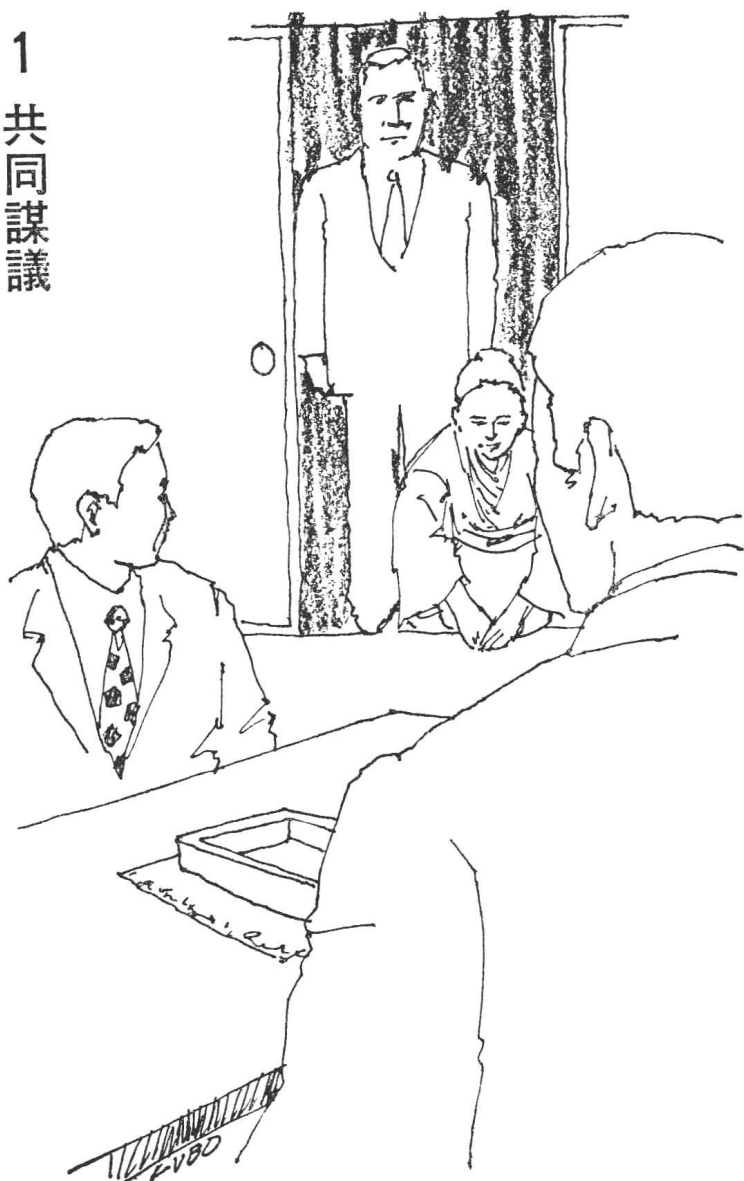
本文イラスト 久保久男

小説

脱

税

1 共同謀議



秘書からの連絡で、自動車の手配ができたことを知ると、近田信二はすぐに席を立った。

「赤坂の花村へやってくれ」

と運転手に声をかけた。近田商事社長、近田信二は赤坂の高級料亭を今夜の招集の場に指定していた。敵を騙すためには、まず味方を欺かなければならない。今夜、よんである深井常務と遠藤経理部長の二人以外には、この会合を知られたくなかった。近田は、ごく近しい政治家に会うときとか、かざられた一、二の客をもてなすときには、この花村を使うが、それも年に数えるほどであり、いうなれば極秘の会合場所だ。もちろん、よんである二人には初めての料亭である。

渋滞のひどい溜池をやっとぬけると、またも、TBS近辺の混雑である。花村にたどりつくのに三十分もかかり、近田はいらいらしてきた。それにこれからの談合で神経を使うことが予想されるだけに、よけい自動車の遅れが気になった。

急ぎ足で、花村の門をくぐると、玄関には若い仲居が七、八人並んで、鄭重な挨拶をした。半年ぶりであった。いつもの係りの仲居が、案内に立った。

「今夜は静かな小さいお部屋ということで、竹の間をご用意致してございます。お連れさまの遠藤商會様の方が、先刻おみえになっています。こちらへ」

曲がりくねった廊下を案内された。部屋では遠藤が書類をめくりながら、所在なげに待っていた。

「やあ、おまたせしました」

遠藤に声をかけると、振り返って仲居にいった。

「もう一人お客様がきて、四、五十分話してから酒にするから、そのつもりで頼みますよ」

遠藤豊吉は近田商事の経理部長である。さもお客をするかに装うのは、その話が重大な会社の秘密に触れることであり、絶対に洩れてはならないことだからであった。

「遠藤商会とは、うまく化けたものだ。会社のものには、誰にも気づかれなかったらうな？」

「それは大丈夫です。今日は五和銀行の接待ということになっていますから……」

やがて、大きな図体らしい足音とともに、襖の外で、仲居の声がした。

経理担当常務の深井五介が案内されてきた。深井も客を装い、「お招きを受けたのに遅参いたしました……」などと、よそよそしい、正座した。

三人が揃った。近田は膝を崩し、今夜の深井と遠藤が熱海に出張した手筈になっていることを念押しした。二人は黙ってうなずき、タバコを取り出すと火をつけた。

近田商事株式会社は、戦後のどさくさにできた会社で、創立から二十数年経っていた。新潟県人特有の粘り強さで近田がここまでもってきた、どこにでもあるワンマン会社といえるだろう。資本金三億二千万円と今こそ大きくなったが、十九万五千円から始まった会社である。後藤工業株式会社が世界的な特許を持っている測定器を扱い、現在、計測用機械の専門商社としてこの業界では誰知らぬものもない存在となった。

近田は茶をすすり、本題をきりだした。

「さあて、それでは始めるか。遠藤君、まず書類をだしてくれ」

近田に指示されて、遠藤が出した書類は、会社の今期の決算書の一部である貸借対照表と損益計算書であった。その書類には、いずれも法人税等を差し引き計算する前の当期利益は四億五千万円を超えていることが示されていた。

「ずいぶん利益がでたものだな。税金は全部でどのくらいになるんだ」

近田は俄然、社長室でのいつもの態度にかえた。

「だいたい三億円近くになります」

と遠藤がかしこまって答えた。

「せいぜい一億円ぐらいに縮まらないものかね」

「そうですね」

遠藤はいつもの茫洋とした調子で答えたものの、その表情からは長い間経理を預かっている男の自信が読みとれた。

以前は深井が経理部長をしていた。近田商事の営業規模が急激に伸びるにつれて、その利益は倍増を重ね、近田は税金の負担の重みを感じるようになった。ちょうどその頃、妻の従弟にあたり、横浜で小さな捺染工場の経理主任をしていた遠藤を雇い入れた。初めは深井の下で記帳事務をこつこつと

1 共同謀議

貸借対照表	
昭和52年3月31日 (単位:千円)	
資 産 の 部	負 債 及 び 資 本 の 部
I 流動資産	I 流動負債
現金預金 193,820	支払手形 102,819
受取手形 486,200	買掛金 213,945
売掛金 503,260	短期借入金 58,000
在庫商品 88,720	前受金 11,360
貯蔵品 13,980	未払費用 42,819
貸付金 59,700	流動負債合計 428,943
貸倒引当金 Δ 20,983	
流動資産合計 1,324,697	II 固定負債
	長期借入金 122,000
II 固定資産	退職給与引当金 13,610
1 有形固定資産	固定負債合計 135,610
建物 73,700	III 特定引当金
車両運搬具 23,400	価格変動準備金 1,863
什器 10,880	海外市場開拓準備金 2,115
減価償却引当金 Δ 9,545	特定引当金合計 3,978
有形固定資産合計 98,435	負債合計 568,531
2 投資その他の資産	I 資本金 320,000
敷金 12,000	II 利益準備金 13,280
投資その他の資産合計 12,000	III その他の剰余金
	1 任意積立金 30,800
	2 当期末処分利益 502,521
	その他の剰余金合計 533,321
	資本合計 866,601
資産合計 1,435,132	負債資本合計 1,435,132

やっていたが、税金対策での鋭い発言と知恵に眼をつけられ、深井にかわって遠藤が経理一切をまかされるようになったのである。近田は深井を経理担当常務取締役に格上げした。以来脱税工作は遠藤の大きな仕事のひとつとなっていた。特にここ五、六年、税務当局になかなか尻尾をつかませない工作振りは、近田の高く評価するところであった。

「遠藤君、だいたい圧縮できるポイントを考えてきたんだろう。今年は例年と違うからね」

損益計算書	
自・昭和51年4月1日・至昭和52年3月31日	
(単位:千円)	
I 営業収益	
売上高	5,836.780
II 売上原価	
期首商品棚卸高	61.550
当期仕入高	5,024.519
計	5,086.069
期末商品棚卸高	△ 88.720
売上総利益	4,997.349
	839.431
III 販売費および一般管理費	
役員報酬	45.000
給料手当	106.520
家賃	18.000
修繕費	30.510
旅費交通費	34.810
運送費	20.180
広告宣伝費	58.750
交際費	13.685
販売促進費	8.231
消耗品費	5.180
減価償却費	2.392
水道光熱費	1.246
貸倒引当金繰入損	20.983
退職給与引当金繰入損	3.211
雑費	1.124
営業利益	369.822
	469.609
IV 営業外収益	
受取利息	2.816
雑収入	1.534
V 営業外費用	
支払利息	11.623
支払割引料	4.894
貸倒損失	1.310
雑損失	492
経常利益	18.319
	455.640
VI 特定引当金繰入額	
価格変動準備金繰入額	1,863
海外市場開拓準備金繰入額	588
当期末利益	453.189
VII 前期繰越利益	
当期末処分利益	502.521

深井は遠藤をさぐるように声をかけた。戦前に会計の勉強をしたにすぎず、遠藤のように新しい会計とか、企業会計原則などの知識は浅く、当然、税法にも暗かった。そうすると、いまの会社の経理とか税務的な処理については、遠藤に一目を置かざるを得ない立場にあったが、近田との古いつながりで経理担当常務を務めている以上、ときにはその威厳を示す必要があった。

「最初に利益を圧縮するためのポイントになるところをごらんいただきたいと思います」

遠藤はいいながら、手書きのコピー・メモを近田と深井に渡した。そのメモには表題は書かれないまま、次ページのような項目が羅列してあるだけだ。

おおよその解説を加えながら、遠藤は経理操作の要点を説明していった。

「それで具体的には、どういうようにもってゆくんだ」近田はおだやかにいった。同時に深井も遠藤の顔をのぞきこむように、「売上げを落とすといっても、最近の税務調査では、すぐわかってしまうというじゃないか。大丈夫かね」と、大きな体に似合わない声でぼそぼそと聞いた。

「これは去年もやったことなんです、うちは売掛金の口数が多いので、一社ごとの売掛金の残高は、きちんとした金額をあげておくんですよ。合計のところを、五千万円ぐらい少なくしてしまうんです。それに見合う売上高を落としておけば、余程綿密な調査をやられない限り、判りっこありません。ほんとうは、今年の方でそれをもとに戻して、正規の金額に直さなけりやならないんですが、それをやると、今年の利益がもっと増えてしまいます。それに去年は税務調査がなかったし、ここ二、三年の

一 売上収益関係

- (一) 売上げを落とす
- (二) 期末に近い売掛金の入金、前受金等負債勘定にする
- (三) 不良品として返品をおこし、廃棄処分にする

二 売上原価関係

- (一) 仕入勘定をふやす
- (二) 棚卸商品を圧縮する

三 営業費用その他関係

- (一) 給料手当を増額する
- (二) 交際費、販売促進費等を増額する
- (三) 売掛金、貸付金につき貸倒損失を計上する

分は大丈夫だろうと思うので、もう少し上乘せして落としておいたらどうかと考えております。どうでしょう」

と遠藤はきっぱり答えた。

これは税務当局の調査官もよくひっかかる手口である。百口以上も取引先があると、いちいちその取引ごとの売上高を計算するのは、容易なことではない。そこで、ちよつと手を抜いて、

取引先の決算期末の売掛金の残高の照合チェックをやり、確定申告書に添付する勘定科目内訳書の売掛金の残高明細が会社の売掛金元帳に記載された個別の

取引先ごとの残高と合致していることを確認する。つまり、一つ一つの取引先ごとの売掛金の残高は、売上先元帳の残高とびったり合っている。一社か二社の年間の売上高とそれに対する入金高とを照合し、売掛金として残っている金額を計算してみても一致する。このようにきちんとさえしていれば、全部の取引先の売掛金残高の合計額は、検算してみなくても、大丈夫だと調査官に錯覚を起こさせてしまうのである。たとえば決算書の上では貸借対照表の売掛金勘定として、七千八百五十万円と計上してあるが、これは圧縮された金額で、ほんとうは正確に全部について算盤をいれてみれば九千八百五十万円であったというような経理操作だ。ミクロ的に正確な数字を並べ、マクロ的には圧縮して少ない数字が計上されているという不正経理である。

しかも、簿記上では売掛金は借方であり、売上高は貸方にあるので、両方から同じ金額が減額されていても、試算表には狂いがないわけである。

極めて単純ではあるが、税務当局の繁忙さに便乗した頭腦的な税金逃れの手口といえる。

遠藤はこれをもう一度、さらに手の込んだ方法でやろうとしているのであった。

「それに期末に近くなつて大口の取引が、五口ぐらいあるのです。そのうちから三社分は、入金しているのですが、まだ売上げを立てるなどってあります。金額にして約八千万円になります。この入金分については社長や常務ともご相談して、前受金か一時借入金にでもしたらどうかと思つています」